

3.3 駆除の効率・効果を高めるポイントや工夫

3.3.1 漁具の効果的な組合せ方

Point

- 漁具によって捕獲できる個体のサイズが異なる。
 - ✓ 大型個体はカゴ網・連続捕獲装置が有効。
 - ✓ 小型個体はタモ網・サデ網及び人工水草が有効。
- 複数の漁具を組み合わせることで、効率の良いアメリカザリガニの駆除が可能。

駆除に使用する漁具により、捕獲できるアメリカザリガニの体サイズには明瞭な差がみられます。カゴ網や連続捕獲装置は大型個体が多く捕獲できる一方で、タモ網・サデ網や人工水草では小型個体を中心に捕獲されます。体サイズ別の駆除に適した漁具の一覧表を表 3-9 に示します。

表 3-9 体サイズ別の駆除に適した漁具

駆除対象とする体サイズ	漁具
中型・小型個体 (頭胸甲長 23mm 未満、 全長60mm未満)	<ul style="list-style-type: none"> ・ タモ網・サデ網 ・ 人工水草 ・ カゴ網(小型個体を対象とした改良を行ったもの)
大型個体 (頭胸甲長 23mm 以上、 全長60mm以上)	<ul style="list-style-type: none"> ・ カゴ網(あなごカゴ、角型カゴ網、網もんどり、アタッチメント付きカゴ網等) ・ 連続捕獲装置 ・ 人工巣穴

アメリカザリガニの体サイズの違いによって効率的・効果的に捕獲できる漁具が異なるという傾向は、実証調査でも確認されており、その一例を図 3-30 に示します。

実証調査では、カゴ網や連続捕獲装置では繁殖が可能となる頭胸甲長 27mm 程度以上の大型個体が多く捕獲でき、タモ網・サデ網と人工水草では頭胸甲長 20mm 以下の小型個体が捕獲できました。この違いは、繁殖可能なサイズとなった大型個体(成体)は穴を掘って隠れ、まだ穴を掘ることができない小型個体(幼体)は堆積物や水際の植生帯に集まるといったアメリカザリガニの成長段階別の隠れ場所の違いや、夜行性という本種の生態特性が関係していると考えられます。加えて、カゴ網の目合いがタモ網より大きい場合が多いことや、小型ザリガニは大型ザリガニがトラップ式漁具の内部に存在していると、捕食への警戒感からトラップへの進入が抑制されること等も、その要因の一つとなっていると考えられます。

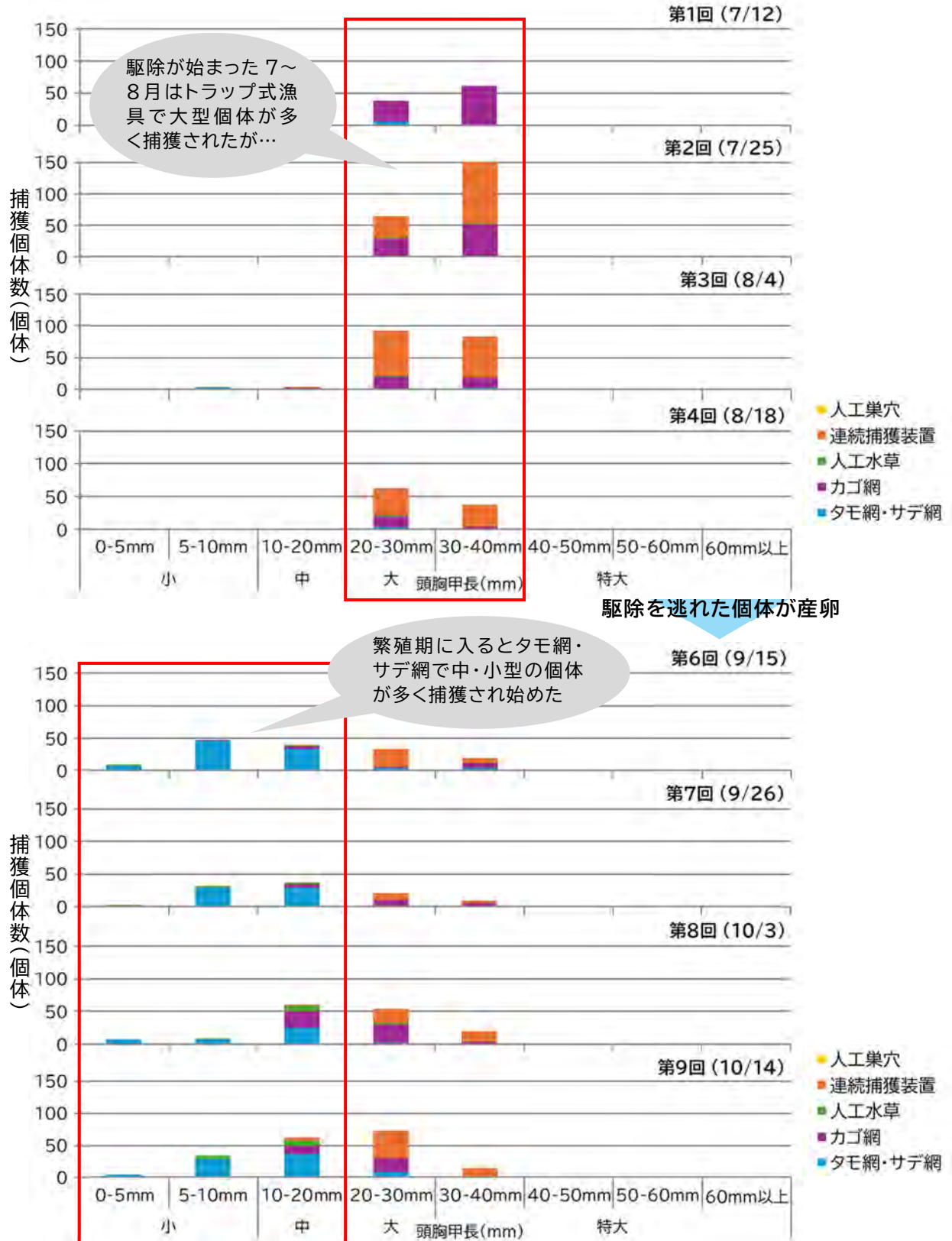


図 3-30 アメリカザリガニ捕獲個体数の遷移(サイズ別・漁具別)
(農林水産省実証調査結果より)

一般的に、駆除が順調に進むことで、捕獲されるアメリカザリガニの体サイズが大型から小型に変化していきます。この時に、例えば大型個体の捕獲に適したカゴ網のみを使い続けると、小型個体の大部分を駆除することができません。そして、カゴ網で捕獲されなかった小型個体が成長することで、駆除を継続してもアメリカザリガニが減少しない状態になります（図 3-31）。一方で、小型個体が捕獲されるタモ網や人工水草のみを使用しても、昼間は巣穴に潜んでいる大型個体を駆除できません。

このため、効率よくアメリカザリガニを駆除するためには、大型個体を対象とした方法と中型・小型個体を対象とした方法を組み合わせることが非常に重要です（図 3-32）。

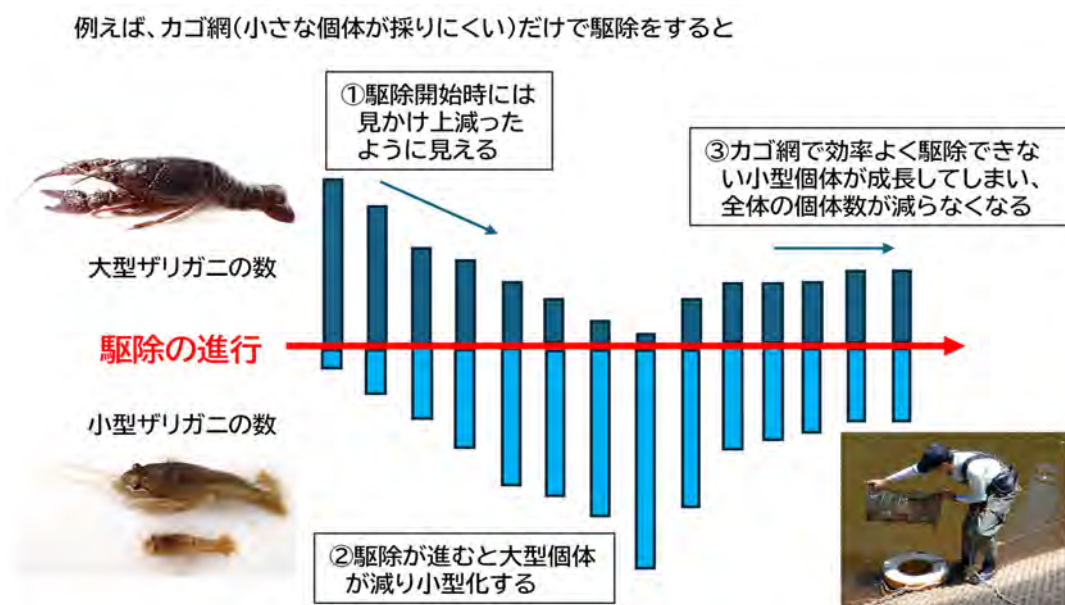


図 3-31 カゴ網のみで駆除した場合の捕獲状況の推移イメージ

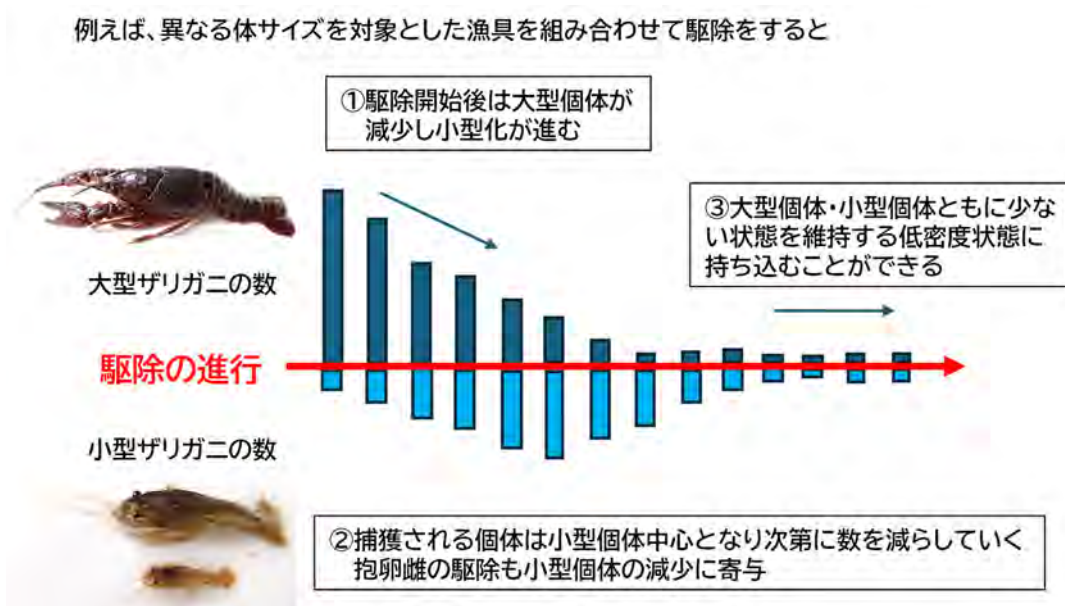


図 3-32 多様な手法で幅広いサイズの個体を駆除した場合の捕獲状況の推移イメージ

3.3.2 漁具の努力量・設置数

Point

- トラップ式漁具の設置間隔は、10～20m程度以下で駆除の効果を確認。
- 駆除を行うため池外周長に対し、10～20m程度の間隔で設置することを目指して、必要な漁具の数を算定する。

ため池及び用排水路におけるトラップ式漁具の設置数について、実証調査における設置個数の事例を表 3-10 に示します。

アメリカザリガニの駆除によって CPUE の減少傾向が確認されたため池（表 3-10 赤枠）では、10～20m程度の間隔でトラップ式漁具を設置していました。これらのため池では、駆除の効果は駆除開始から3年程度で現れ始めていました。また、用排水路（表 3-10 青枠）の場合は等間隔ではなく、集水ます等にトラップ式漁具を複数個まとめて設置していました。

以上のことを踏まえ、ため池の場合は外周長を基準として、また用排水路の場合は区間内のアメリカザリガニが集まりやすい場所の数を参考として、トラップ式漁具の設置数を検討するとよいでしょう。

表 3-10 実証調査を行ったため池・用排水路ごとの駆除努力量

No.	調査地の所在地	調査地記号	ため池外周長 (m)	ため池貯水量 (m ³)	ため池面積 (m ²)	駆除調査1回当たりの漁具設置個数				駆除の効果
						カゴ網	連続捕獲装置	人工水草	人工巣穴	
1	岩手県	r	115.5	600	824.0	10～19	0	3	0	
2	神奈川県	c	87.8	180	462.0	0	0	0	120	
3		d	57.4	83	209.1	0	3	1～2	30	駆除効果あり
4		f	85.5	130	429.0	0	4	1～2	30	駆除効果あり
5	富山県	i	109.6	1,200	763.1	6	3	3	9	駆除効果あり
6		s	99.9	1,861	739.3	4～6	2	2	6	
7	滋賀県	l	365.2	20,000	8,350.2	2	3	0	0	
8		m	396.8	15,800	7,709.9	6	8	2	1	駆除効果あり
9		t	781.3	113,600	26,607.9	0	5	1	1	
10	山口県	n	40.4	400	67.4	15	4	4	9	駆除効果あり
11		o	31.9	400	52.9	15	4	4	9	駆除効果あり
12		p	117.7	2,400	936.2	10	8	8	15	
13	福岡県	q	177.8	6,800	1,981.6	15	5	0	5	
14	愛知県	排水路 j	水路の総延長 591.0	-	-	22～25	0	0	0	
15		水田 k	-	-	ほ場面積 3,200.0	0	0	0	48	

注 1) 本表は、令和6(2024)年時点での調査結果を示す。

注 2) 山口県のため池については岡山大学未発表データから整理(令和8(2026)年3月現在)

(1) ため池

ため池における漁具の設置数について、どの程度の設置間隔であれば捕獲効率がよいのかを実証調査の結果を基に検証しました。検証では、単位努力量当たり捕獲数（CPUE）を駆除効果の指標とし、CPUEが減少した場合のみ、駆除の効果によりアメリカザリガニが減少していると判断しました。

CPUEの推移から、駆除によってアメリカザリガニが減少したと判断したため池では、連続捕獲装置やカゴ網の設置間隔が、ため池の外周長に対して20m以下程度であることが確認できました（図3-33）。なお、環境省の防除マニュアルにおいては、漁具の設置間隔をおおむね10m程度と設定されています。

以上のことから、ため池でトラップ式漁具を仕掛ける場合には、10～20m間隔に1基を目安として設置することが望ましいです。

なお、ため池では、面積が大きくなるほど面積に対する外周の割合は小さくなるため、大型のため池では駆除効果が現れにくくなります。そのような場合には設置間隔や頻度を見直す等の工夫が必要です。

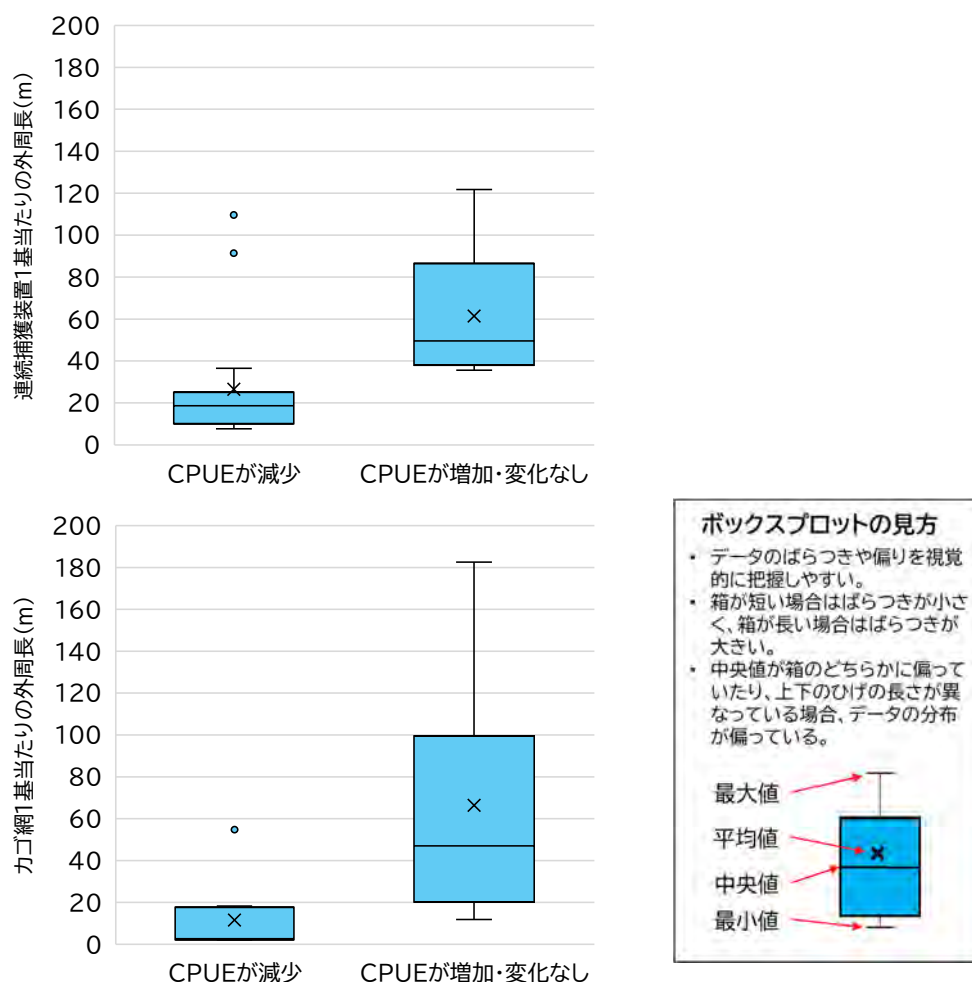


図 3-33 CPUE の減少と漁具設置間隔（個数）の関係
（農林水産省実証調査結果より）

(2) 用排水路・水田

用排水路における実証調査（愛知県安城市）では、600m程度の規模の用排水路において、令和5（2023）年度には22～25個、令和6（2024）年度には48～54個のカゴ網を仕掛けて駆除を行いました（実際にはアメリカザリガニが集まりやすい集水ます等の箇所に複数個の漁具をまとめて設置しており、設置間隔は必ずしも均等ではありません）。

実証調査結果を踏まえると、用排水路においては、駆除対象区間内の集水ますや陰ができている場所に複数個の漁具を集中して設置することで効果的に捕獲できると考えられます。なお、環境省の防除マニュアルでは、漁具の設置間隔はおおむね10mとされており、捕獲に適した区間（流れが緩く、植生がある区間等）が連続している水路へ漁具を仕掛ける場合には、このような既往知見も参考となります。

アメリカザリガニは、水が枯れた水路には生息していません。用排水路において、非かんがい期に完全に落水する区間がある場合は、当該期間は周辺の用水や排水が集まる集水ます等のアメリカザリガニが生息している可能性がより高い場所に漁具を設置する等、通水状況に応じて漁具の設置場所を変更し、非かんがい期も継続して駆除を行うことが望ましいです。

水田について実証調査を行った事例は少ないですが、人工巣穴を畦16m当たり1組の間隔で設置している事例（愛知県農業総合試験場，2024ほか）があり、基本的には外周に対して10～20mの間隔で設置することを目安として、取組を進めることが望ましいと考えられます。

3.3.3 効果的な漁具の設置場所や捕獲場所

Point

- トラップ型漁具を仕掛けるのに適した場所は、水際の植物帯、樹木の陰、植物片が溜まる場所、水の出入り(動き)がある流入部や余水吐の近く等。
- 周囲にアメリカザリガニが隠れる場所がない単調な環境では、人工水草を使うと隠れ場所になるため特に有効。

実証調査の調査結果を踏まえ、アメリカザリガニを捕獲しやすい、あるいは捕獲しにくい環境条件の一覧表を表 3-11 に示します。

表 3-11 アメリカザリガニの捕獲のしやすさ・しにくさに関するため池の環境条件
(農林水産省実証調査結果より)

区分	環境条件
アメリカザリガニを捕獲しやすい環境	<ul style="list-style-type: none"> ・ ため池の岸際の樹木(特に広葉樹)の枝葉により水面の広い範囲に陰が形成されている場所(①) ・ 流入水が流れ込む箇所周辺の周辺等、水の出入り(動き)があるところ(余水吐の周辺等)(②) ・ 水際の植生帯(ヨシやマコモ等)の近く(漁具の周囲が植生帯に囲まれるような場所)(③)
アメリカザリガニを捕獲しにくい場所	<ul style="list-style-type: none"> ・ 植生帯から離れている(隠れ場所が少ない)場所(④) ・ 水の動きが少ない場所(④) ・ ヒシ等の浮葉植物によって水面が閉塞された場所(閉塞にともなう水底の貧酸素化の影響と推定され、ヒシが減少すると捕獲数が再び増加する傾向が確認されている)(⑤)
その他の要因から漁具の設置に工夫が必要な環境	<ul style="list-style-type: none"> ・ 水深が深い場所 →タモ網・サデ網を用いた駆除が行えない場合が多いため、幅広いサイズの個体を捕獲できるよう、改良型のあなごカゴ※p54 参照や改良型の連続捕獲装置※p59 コラム⑦参照を用いる等の工夫が必要 →おおよそ水深1m付近を境にそれより深い場所では貧酸素環境となり、アメリカザリガニが生息していないことが多いため、基本的に漁具は1m以浅に設置(⑥)。 →湧水があり酸素が供給されている場所等、駆除実施場所の環境によっては1mを超える水深でも生息している可能性があるため、駆除実施場所の環境及び駆除の進捗状況を踏まえて、漁具の設置場所は適宜見直していく必要がある。 ・ カゴ網の入口が障害物でふさがれない場所 →餌による誘引範囲を狭めずに、広く誘引するため。
漁具の設置上の工夫が必要な条件	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人工水草は、隠れ家となる障害物が少なく周りの環境が単調な箇所(ため池の堤体部分等)に仕掛けることで、人工水草自体が隠れ場となることから捕獲効果を高めることが可能である。

※表中の丸付き番号は、図 3-34 に対応する。

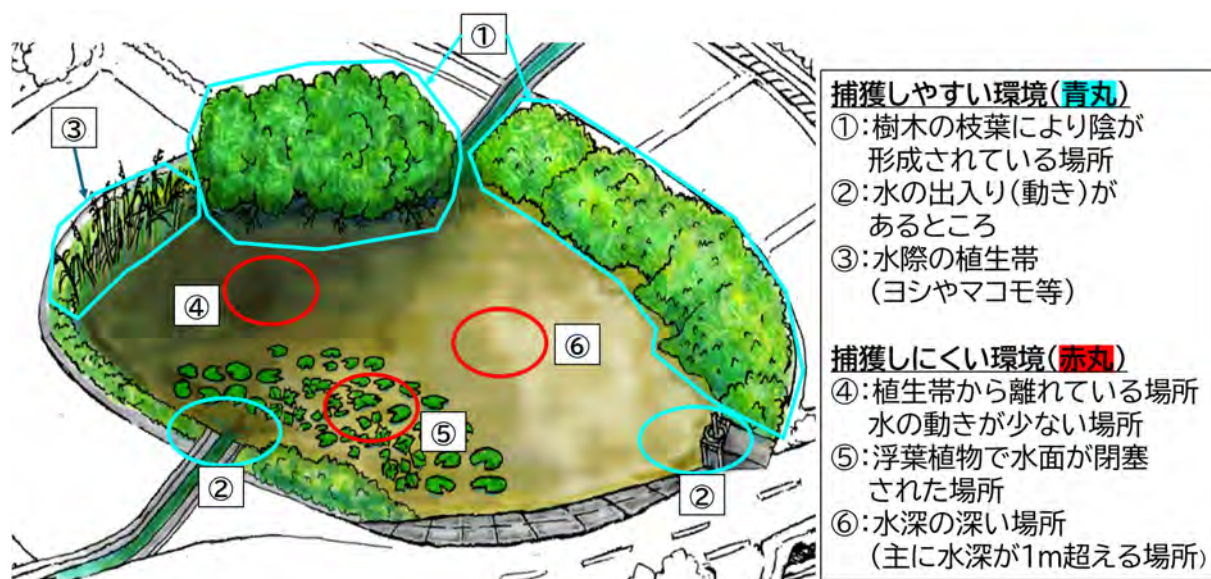


図 3-34 ため池における駆除効果が高いあるいは低い漁具設置場所の概略図

(1) ため池

1) トラップ式漁具(カゴ網、連続捕獲装置等)

漁具の効果的な設置場所を実証調査の結果から検証しました。効率の良い捕獲箇所を例を図 3-35 に示します。

実証調査では、トラップ式漁具(カゴ網、連続捕獲装置等)は、樹林地の近くや植生帯での捕獲数が多く、植生帯の外での捕獲数は少ない結果が得られています。そのため、植生が垂れ下がり陰が形成されている場所、植生帯からの距離が近い場所等のように、アメリカザリガニが隠れ場所として好む環境の近くが効率的な捕獲につながります。

一方で、水面をヒシ等の浮葉植物が覆って閉塞している場所ではアメリカザリガニの捕獲数が減少し、ヒシが減少すると捕獲数が再び増加する傾向がみられました。これは、ヒシ等の浮葉植物で水面全体が覆われると、底層部が貧酸素になることから、アメリカザリガニが生息しにくいと考えられます。

加えて、ため池の流入部や流出部等、水の動きがある場所についても捕獲効率が良いことが明らかとなっています。これは、水の動きがある場所では水質の変化が少なく、貧酸素化しにくいことが要因であると考えられます。また、ため池の流入部にトラップ式漁具を設置する際には、トラップ式漁具の進入口が片側のみにあるもの(連続捕獲装置等)を使うときに、進入口を流れの下流側(ため池側)に向けて設置することで、餌に誘引されたアメリカザリガニがトラップ式漁具内に進入しやすくなります。

ため池の水深が1mを超えるような箇所では、貧酸素環境であることが多く、基本的にアメリカザリガニは生息していない可能性が高いと考えられます。このため、アメリカザリガニを効率よく捕獲するためには、水深1m程度までの浅瀬に漁具を設置することが基本となり、特段の事情がなければ1mを超える水深で駆除作業を行う必

要はありません。ただし、湧水によって水中に酸素が十分に供給される場所のように、駆除実施場所の条件によっては、1 mを超える水深でも生息が可能な場合があります。

そのため、まずは1 m未満での駆除作業を行って駆除の進捗状況を見つつ、一向に駆除が進まないような場合は、より水深の深い位置にも生息可能な環境があることを考慮し、水深が1 mを超える場所への漁具の設置も含めて、漁具の設置位置を再度検討することが望ましいです。

また、ため池の周辺の良い環境へのアプローチには、安全対策に十分留意した上でボートを使用することも検討するとよいでしょう。



図 3-35 ため池における駆除効果が高い漁具設置場所(富山県、滋賀県、福岡県)

2) 人工水草

人工水草は、水中に植物堆積物等がない環境（図 3-36 左側）に設置した場合にはアメリカザリガニを多く捕獲できましたが、池底に落ち葉や落枝が多く、岸際に水に浸かった垂下植物がある環境（図 3-36 右側）ではあまり捕獲できないことが分かりました。逆に、周辺に隠れる場所が少ない環境では、アメリカザリガニが人工水草を隠れ場所として選択的に利用することが期待できます。そのため、人工水草は、できるだけアメリカザリガニが隠れる場所が少ない環境に設置するとよいでしょう。

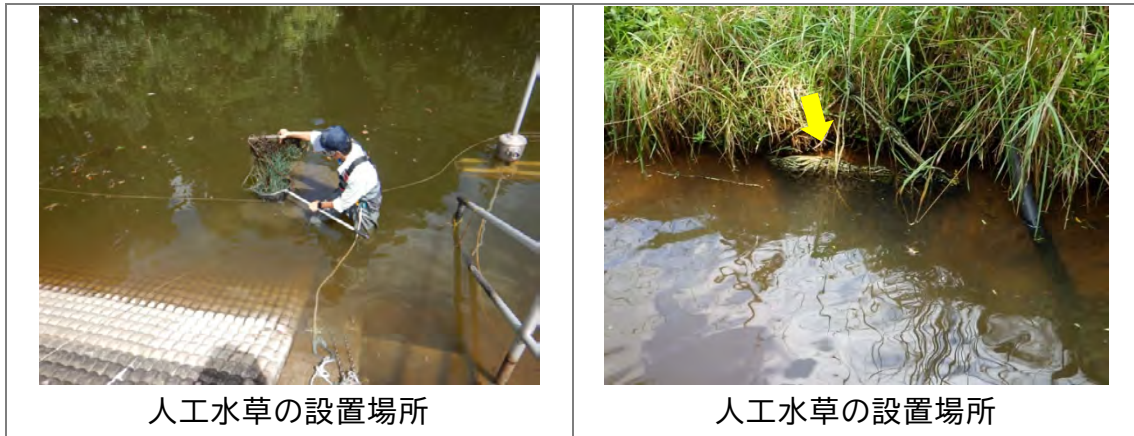


図 3-36 ため池における人工水草の設置場所の例(富山県、山口県)

3) タモ網・サデ網

タモ網・サデ網では、余水吐近くや水際植生の枝葉の張り出しの下、落ち葉等の堆積物が多い浅場において、小型のアメリカザリガニがまとまって捕獲される傾向がありました。そのため、岸際の堆積物の多い箇所を狙って網を入れるとよいでしょう。



図 3-37 ため池におけるタモ網・サデ網の捕獲場所の例(富山県)

(2) 用排水路・水田

用排水路におけるトラップ式漁具等の効果的な設置場所を実証調査の結果から検証しました。用排水路では、暗きょ部の出入口付近や集水ます等、アメリカザリガニが隠れやすい場所やその近くの箇所を対象として漁具を設置することが重要です。効率の良い捕獲箇所の例を図 3-38 に示します。

山形県村山市で実施した農業者からの聴き取り調査では、ブロックローテーションによって畑作物の後に水稻を作付けしているほ場及び当該ほ場沿いの排水路では、アメリカザリガニの生息数が少ない傾向があることが分かりました。畑作物作付け時にほ場が乾田化することに伴い、周囲の水張水田等にアメリカザリガニが移動している可能性があり、水田でアメリカザリガニを効率的に捕獲するには、水稻が連作されているほ場や水稻ほ場沿いの排水路等を優先してトラップ式漁具等を設置するとよいと考えられます。

また、用排水路の中には、雨水や山からの染み出し水等のため、非かんがい期でも水が流れている水路があります。そうしたところでは、一年中アメリカザリガニが生息可能となりうるため、優先的に漁具の設置を検討するとよいでしょう。



図 3-38 用排水路における駆除効果が高い漁具の設置場所(愛知県)

3.3.4 効果的な駆除のタイミング

Point

- 以下のタイミングの駆除は特に駆除効果が高い。
 - ✓ 5～6月：大きめの個体を駆除し、産卵や稚ザリガニの発生を抑制できる。
 - ✓ 7～10月（繁殖期）：産卵前の雌個体の駆除が可能。

アメリカザリガニを効率的に減らすためには、これから産卵する繁殖可能な雌個体や既に抱卵した雌個体の駆除が最も重要です。実証調査では、雌個体の抱卵数について、既往知見を基にした試算をしたところ、1個体の産卵数は100～900個程度と推定されることから、繁殖可能な大きさの雌1個体を捕獲することは、将来産まれてくる100～900個体程度を駆除したことと同等の効果があるとみなすことができます。

実証調査の調査結果から推定した各調査地区の繁殖期を図3-39に示します。雌個体が繁殖可能な状態である時には、尾部の腹面に乳白色の斑点（セメント腺）が明瞭に確認できるようになります。繁殖可能な状態の個体（セメント腺が発現した個体）は7～10月に多く見られているため、実際の駆除作業は、繁殖期に入る前の5～6月頃から駆除に取り組みましょう。その際は、繁殖可能な大きさ（頭胸甲長23mm以上）の大型個体が効果的に捕獲できるように、大型個体の捕獲に適したカゴ網や連続捕獲装置を用いた駆除を行うことが重要です。

なお、アメリカザリガニの繁殖活動が最も盛んとなる時期は9～10月前後と考えられますが、この時期には、抱卵した雌は巣穴に入り込むことが多く、トラップ式漁具では捕獲しにくくなる可能性があります（図3-40参照）。

このような抱卵雌を最も効果的に捕獲する方法は、人工巣穴を使った駆除です（図3-42）。人工巣穴の設置時期としては、繁殖盛期に入る前（7～8月）に設置することがポイントです。また、設置する位置は、巣穴が多いと考えられるほ場の畦やため池の内法のような場所がよいでしょう。

<セメント腺発現個体(繁殖可能な雌個体)が現れる期間>

調査地/月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
岩手県						■	■	■	■			
富山県										■		
神奈川県									■			
愛知県						■	■	■	■	■		
滋賀県						■	■	■	■	■		
山口県										■		
福岡県						■	■	■	■	■		

- 凡例
- 各調査地点における年平均捕獲数より特に多く捕獲された時期
 - 各調査地点における年平均捕獲数より多く捕獲された時期
 - 捕獲データが存在しない時期

<稚ザリガニが現れる期間>

調査地/月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
岩手県						■						
富山県						■	■	■	■	■	■	■
神奈川県	■	■										
愛知県	■	■				■	■	■	■	■	■	■
滋賀県	■	■				■	■	■	■	■	■	■
山口県	■	■				■	■	■	■	■	■	■
福岡県						■	■	■	■	■	■	■
福井県(文献1)					■				■	■		
岡山県(文献2)	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

- 凡例
- 各調査地点における年平均捕獲数より特に多く捕獲された時期
 - 各調査地点における年平均捕獲数より多く捕獲された時期
 - 捕獲データが存在しない時期

<以上から推定された繁殖期>

調査地/月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
岩手県						■	■	■	■	■		
富山県						★	★	■	★	★	★	★
神奈川県							★	★	■	■	■	■
愛知県						★	★	■	★	★	■	■
滋賀県						★	★	★	★	★	■	■
山口県						■	■	■	★	■	■	■
福岡県						■	■	■	■	■	■	■
福井県(文献1)								■	■	■		
岡山県(文献2)	■	■	■	■	■	■	★	★	★	★	■	■

- 凡例(ふ化に約1か月かかることから、稚ザリガニの発生から約1か月前の期間およびにセメント腺個体が捕獲された期間を繁殖期とした。)
- 稚ザリガニ・セメント腺個体の発生状況から繁殖盛期と推定された時期
 - 稚ザリガニ・セメント腺個体の発生状況から繁殖期と推定された時期
 - ★ 抱卵個体が確認された時期

図 3-39 地域ごとのアメリカザリガニの駆除に適していると考えられる季節
(※赤枠が繁殖期と推定される時期)

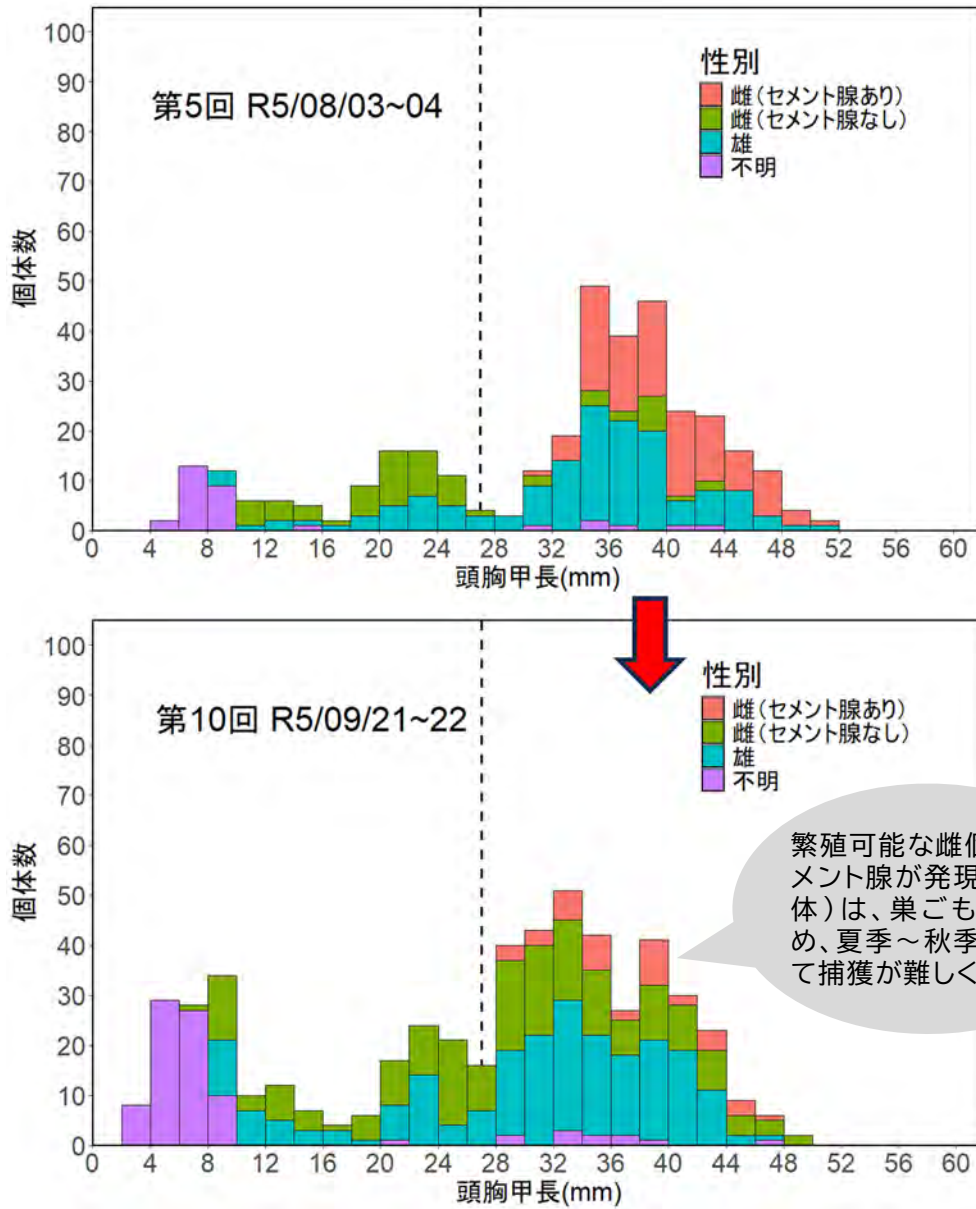


図 3-40 アメリカザリガニの繁殖可能な雌個体の夏~秋にかけての減少の一例 (農林水産省実証調査結果より)



図 3-41 孔内に潜むアメリカザリガニの捕獲の様子(徳島県鳴門市)
(農林水産省実証調査結果より)

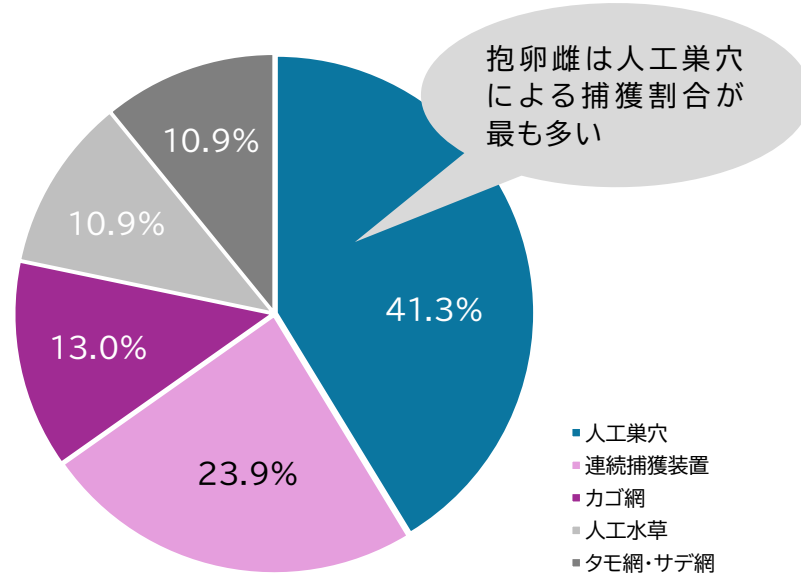


図 3-42 実証調査における抱卵雌の漁具別捕獲割合
(農林水産省実証調査結果より、再掲)

3.3.5 効率的・効果的な駆除手法のまとめ

駆除に当たっての重要なポイントを表 3-12 に示します。これまでの実証調査の結果から、アメリカザリガニを効率よく駆除するためには、個体サイズや生活史段階（抱卵雌等）で捕獲に適した漁具が異なっており、これらを組み合わせて運用することが特に重要であることが明らかになりました。これは、どれか1種類の漁具だけを使用した駆除を継続していても、アメリカザリガニの駆除の効果が現れにくいことを示しています。

表 3-12 実証調査の結果に基づく駆除に当たっての重要なポイント

漁具の組合せ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 捕獲可能なアメリカザリガニのサイズは漁具によって異なる。 ・ カゴ網類では大型個体が、人工水草やタモ網・サデ網では小型個体が捕獲されやすい。 ・ 漁具を組み合わせて、大型個体の捕獲により繁殖を、小型個体の捕獲により次世代の成長を抑制していく。
導入コスト	<ul style="list-style-type: none"> ・ 連続捕獲装置は導入コストが比較的高いものの、特にため池での駆除効率が非常に高い。 ・ カゴ網類は導入コストが低いため入手しやすく、捕獲効率も比較的高い。 ・ これから駆除を始める場合は入手しやすいカゴ網から始めるとよい。
効果的な駆除のための設置位置	<ul style="list-style-type: none"> ・ ため池では、外周長に対して 10-20m 程度の間隔での設置が有効。 ・ 用排水路では、集水ます等の通年で水が溜まっているところでの設置が有効。
効果的な駆除時期	<ul style="list-style-type: none"> ・ 7～10 月頃が繁殖期のため、5～6月頃までに多く駆除を行うことが効果的。

アメリカザリガニの個体サイズ区分を踏まえた効率的・効果的な駆除手法についての重要なポイントを、表 3-13 に一覧表で示します。

実際の駆除に際しては、駆除効率（アメリカザリガニ捕獲数の増減の傾向）と実施体制の実状とを比較しつつ、漁具の追加によって捕獲圧を増やす等、駆除計画の見直しを行うことが、効率の良い駆除を行う上で重要です。

表 3-13 実証調査を基に整理したアメリカザリガニの効果的・効率的な駆除手法

対象とする アメリカ ザリガニ のサイズ		小型・中型 (頭胸甲長 23mm 未満)	大型 (頭胸甲長 23mm 以上)	抱卵個体 (頭胸甲長 27mm 程度以上)
		漁具	<ul style="list-style-type: none"> タモ網・サデ網 人工水草 あなごカゴ(改良あり) 	<ul style="list-style-type: none"> 連続捕獲装置 あなごカゴ カゴ網(アタッチメントの装着が望ましい)
仕様	漁具設置数	<ul style="list-style-type: none"> 1人当たり1時間以上(タモ・サデ網) 10-20m 間隔に1個(人工水草、あなごカゴ(改良あり)) 	<ul style="list-style-type: none"> 10-20m 間隔に1個(漁具ごとで共通) 	<ul style="list-style-type: none"> 10-20m 間隔に数本の人工巣穴を束ねたもの1個程度
	設置場所	<ul style="list-style-type: none"> 集水箇所や抽水植物帯(タモ・サデ網) 水深1m 未満の場所 周囲に障害物がない箇所(人工水草) 	<ul style="list-style-type: none"> 樹幹がある場所 水が動く場所 植生帯に近い場所 水深1m 未満の場所 	<ul style="list-style-type: none"> 樹幹がある場所 水が動く場所 植生帯に近い場所 水深1m 未満の場所
	実施時期	<ul style="list-style-type: none"> 特に繁殖盛期後(9月以降)に小型個体が増加するため、捕獲効率が高くなる 	<ul style="list-style-type: none"> 特に、春と秋の繁殖期とその前後の大型個体が活性化する時期 通年で捕獲を行うことが望ましい 	<ul style="list-style-type: none"> 繁殖盛期は9~10月で、抱卵個体は6月頃からみられる 人工巣穴は繁殖盛期に入る前(7~8月頃)から設置することが望ましい
	回収頻度	<ul style="list-style-type: none"> (タモ・サデ網)1週間に1-2回 	<ul style="list-style-type: none"> (連続捕獲装置)2週間に1回、密度が高い場合は1週間に1回 (あなごカゴ、カゴ網)1週間に2-3回、1晩設置・翌朝回収が効果的 	<ul style="list-style-type: none"> (人工巣穴)1週間に1-2回、1晩設置・翌朝回収が効果的
	人的コスト	<ul style="list-style-type: none"> タモ網、サデ網は特に大きい 	<ul style="list-style-type: none"> 捕獲効率の高さに比べて小さい 	<ul style="list-style-type: none"> あなごカゴは漁具の改良作業が必要 人工巣穴は市販がなく、自作する必要がある
	金銭的成本	<ul style="list-style-type: none"> 比較的低い 	<ul style="list-style-type: none"> 比較的高い 誘引餌は連続捕獲装置で90円/回程度(トッグフードを使用時)、カゴ網で50円/回程度(練り餌Aを使用時) 	<ul style="list-style-type: none"> 比較的低い
	他の生きものへの配慮	<ul style="list-style-type: none"> タモ網・サデ網、人工水草は水中に立ち入る必要があり安全に実施できる場所が限られる あなごカゴは陸上から比較的安全に作業が可能 	<ul style="list-style-type: none"> 陸上から比較的安全に作業が可能 混獲された他の生きものの溺死を防ぐため、網の一部を浮かせる等の工夫が必要 水鳥やカメの混獲を避けるため、40×40mm ネットを進入口に設置する 	<ul style="list-style-type: none"> 人工巣穴は浅場での実施を想定するが水中に立ち入る必要があり安全に実施できる場所は限られる